

経済学史学会全国大会セッション【現代経済思想の根本問題——贈与と所有】

2015年5月31日 9:30-11:40 (於 滋賀大学)

「贈与——私たちはなぜ贈り合うのか——」 若森みどり (大阪市立大学)

1. 『贈与論』最終章の重要性<再発見>

イギリスの人類学者 M.ダグラスによる英語版『贈与論』の序文(1990) “Forward: No free gifts”: 『贈与論』の最終章だけが唐突に現代的な社会問題を扱っていて、古代的な社会の贈与論を論じた第1~3章とのあいだには論理的な断絶がある、という『贈与論』の構成の問題や、最終章の収まり具合の悪さが指摘されて、英語圏での『贈与論』の最終章の低い評価が定着。ダグラスの評価から自由な再読→ D.グレーバー、重田園江[2009]『連帯の哲学 I』勁草書房

モースは 20 世紀初頭の危機をどう分析したのか?

・20世紀初頭の社会のシステムは、贈与道徳に反しているために行き詰まった。

労働して何かを生産する時、人は自己の身体的生命の一部を贈与している。大規模な労働を編成する近代の経済システムは、壮大な構造的贈与関係に基づいていることになる。だが、生産者である普通の人びとは、労働に対する十分な報酬がお返しされていると感じていない。貰ったのにお返しをしない雇用主や富者、そして国家への怒りが「怠惰を引き起こし、生産低下」を招いている。働くことが自らの時間や生命を他者に与えることであり、誠実に果たしてきた自らの労働も他者の労働も公平に報いられることを確信できる経済ビジョンが現代社会に不可避。

・交換の基礎としての贈与(贈与道徳に反すれば交換関係も破壊してしまう。この傾向が国際関係に顕著)。モースによれば、贈りものを循環させる贈与のシステムの発展は、殺し合うことなく互いに向かい合い、大きな犠牲を払うことなく自らを与え合うことを学んだことの結果である。人が物を首尾よく交換できるようになったのは贈与システムの発展に負っているものであり、平和の破壊は交換関係の破壊に帰結する。

・「幸福」と「喜び」——「祝祭」——の欠落もまた、克服すべき課題である。モースによれば、「文明的と称されるわれわれの社会」の停滞の原因は、祝祭的な慣習や制度が著しく損なわれていることにもある。経済発展と富の増大だけでは幸福と喜びはありえない。贈与のシステムの現代的な形態での復権は現代的な「祝祭」の形態を伴うだろう、とモースは見ている。

2. グレーバー：21世紀の社会システムの危機を理解するために、モースを再読

『贈与論』の結論を執筆した当時のモースは、協同組合運動や福祉国家や混合経済への期待に寄り添いすぎてはいないだろうか。このように畳み掛けるのが、グレーバーである[Graeber2011]。

グレーバーによれば、国家も市場も、どこにでもあるはずの「(小文字から始まる)コミュニズム(communism)」から膨大で過剰な「価値」を引き出して、そのような正当化のために「負債の道德」が動員されていることが、モースの『贈与論』を読むことで批判的に認識できるようになる、という。互酬性(互惠性)が反駁しようのない唯一の「正義」になっている政治学の状況が、「負債の道德」の神聖化に手を貸していることを問題視すべきである、という。グレーバーによれば、レヴィ=ストロース以降の『贈与論』解釈は、互酬性(互惠性)という正義の強力な影響下に収まっており[Graeber2001]、現代の「負債の帝国」的状況に対する批判的想像力を提供することができない[グレーバー2009,Graeber2011]。

グレーバーは自らの立場を「アナキスト人類学」と呼び[Graeber2004]、国家と市場によってのみ人間の連帯が可能だとする「現代の神話」を批判する。彼にとって人類学は、人間の協力関係のさまざまな形態や集合的存在の可能性を創造するための、計り知れない宝庫である。

社会関係の創出の論理

『贈与論』には、社会的絆の創造的契機の論理がどのように埋め込まれているだろうか。モースは、贈りものの循環によって社会的絆が恒常的に再生する仕組みに、「全体的給付体系(le système des prestations totales)」という用語を当てている。『贈与論』の課題は、「与え、受け取り、与え返す」という贈りものの循環が維持される仕組みを、未開社会あるいは古代的社会と呼ばれている諸社会の比較分析を通して解明することだった。世界の各地域・各諸島の全体的給付体系のさまざまな形態を検討する『贈与論』の序論では、全体的給付としての贈り合う関係が、対立し合う諸集団または諸社会のあいだで緊密な絆や協力関係を構築するためにつくりだされた、という命題が提起される。

モースによれば、与え、受け取り、与え返すという贈与の体系は、①義務的な性格に基づくものであり、②全面衝突を回避するための同盟関係や協同関係や法的紐帯の創出をつくりだす。つまり、贈与によって、全面的衝突(戦争)の局面を全体的協力関係(平和)に転

換させる契機が創出される（重田 2009）。集団のあいだに協力関係や法的紐帯といった社会的絆が創出される事態に、モース自身は特別な用語を当てていないが、グレーバーはその契機を「社会的創造性(social creativity)」[Graeber2007:113]と呼び、着目する。

グレーバーは、新しい社会関係や新たな絆を創出することを「社会的創造性」と定義するが、社会的創造性には「媒介物(medium)」の役割が大きい。グレーバーによれば、モースの捉えた贈りものの循環にとって、さまざまなクランや集団や個人のあいだを行き来する「媒介物」は、社会的創造性を方向づけたり発現するうえで決定的である [Graeber2007:113]。

モースの贈与交換の概念を相互的交換として定式化したのは、レヴィ＝ストロースである¹。グレーバーによれば、そのような定式化は、一方で「与え、受け取り、与え返す」という贈与の連鎖を等価交換の論理に還元してしまい、他方で、返済の見込みのない贈りものを与えて負目(負債)を作り出す、贈与関係の階層的な側面を見逃してしまう。「与え、受け取り、与え返す」贈与交換には、対立する諸集団・諸個人間に同盟関係や平和的關係を作り出す相互的義務の関係も、従属的な階層的な諸関係も、互いに負債を返済し相互的關係を解消する行為も含まれているのである。グレーバーによれば、贈与という用語は、次の4つの社会編成の論理を含んでいる [Graeber2009:114]。

- ① 共産主義的諸関係：勘定が直ちに釣り合わなくても良いかたちで相互に助け合う対等な協力関係のことをいう。そこでは、「各人の能力に応じて与え、各人の必要に応じて受け取り」、各人の能力に応じて与え返すという贈与の連鎖が、社会的絆を編み上げている。「小文字から始まる共産主義」は人間のいるところにはどこにでも存在する協力関係であり、社会関係の基礎である。そこには、協力関係を創出する「媒介物」の贈り合いが見出される
- ② 相互的交換：相互的交換は、勘定がただちに釣り合うべきだという相互の義務によって行われる。相互的交換においては、等価のものが「媒介物」となることが条件として要請される。等価の媒介物を相互に交換して勘定が釣り合えば、直ちに相互の關係は解消する。相互的交換が存続しているように見えるのは、交換が再度繰り返されているか、等価物の交換が「遅延」しているか、のいずれか。

¹相互的・互酬的交換から等価、公正の論理へといたるレヴィ＝ストロース以降の人類学は、市場の論理に対抗する可能性を損なってきた、とグレーバーは批判している [Graeber2001]。

- ③ 階層的諸関係：返済の見込みのない贈りものを与えたり貸しを作ること、あるいは返済不可能な贈りものを受け取ったり借りたりすることは、階層的諸関係を形成する。
- ④ 英雄的贈与：ポトラッチのように、英雄的贈与は、集団間の優劣をめぐる熾烈な戦いである。英雄的贈与が行われる敵対的關係は、当初は対等な関係であったものから勝者一敗者という階層的な社会関係を、結果として生み出すことになる。

負債の論理

贈り合うことで創出される階層的な社会関係という論点。グレーバーによれば、モースの『贈与論』は負債の本質に関して重要な理論的研究を行っている（Graeber2009:112）。モースの問いは、「贈りものを受け取ると、人はなぜお返ししなければならないと感じるのか、あるいは貰った以上のお返しをするように受贈者を義務づけるのはなぜか？」をめぐって提起され、「負債」「支払い」「貨幣」「返済」「貸与」「名誉」「信用」、「賠償」「責任」に関連するさまざまな概念が説明される。与えることが他者を貶め支配する手段となり、階層性を創出する契機となるのである。貶められ従属しないために、人はその恐怖から、また、他者の支配から逃れるために、必死になって債務を返そうとする。多くの場合には「利息」をつけて返済しようとする。利息が正当化されるのは、モースによれば、貰ったり借りたりした以上のものを返さなければ、元の地位や身分を回復することができない、という理解に由来している。

「お返しに失敗することへの罰は、負債のために奴隷になることである」[Mauss1925=2009:108-109 一部改訳]。「贈りものを受け取ると、それと共に『荷物を背負い込むことになる』」のであり、贈与によって階層性（ヒエラルキー）が作られる」[Mauss1925=2009:276]。

グレーバーは、上記のモースの論点にヒントを得て『負債』を執筆した。グレーバーが負債論を執筆した動機は二つある。第一は、現代に至っても続いているモースの『贈与論』についての人類学や社会学の膨大な研究が、主として、社会的交換や相互性・互酬性（互惠性）の観点から行われている、という状況への異議申し立てである。市場の言説が人類学の領域に深く浸透し、あらゆる社会の正義や道徳性を交換や互酬性に還元しようとする潮流に対して、グレーバーは挑戦しようとしている[Graeber2001;Graeber2011]。

第二に、人びとに内面化された新自由主義的統治の規律として負債の返済道徳を捉えるグレーバーは、負債の道徳を相対化する人類学的視座が現代社会の構造的な暴力の理解に役立つ、と確信している。では、グレーバーは「負債」をどう定義しているのだろうか？

グレーバーは、負債が生じる状況を次のように特定して説明している。

「私たちが『負債』と呼ぶのは、それが支払われうるからであり、平等性が回復する可能性が残されているからである——そのためにどれほどコストがかかっても、場合によっては死や致命的な傷をもたらす場合であったとしても…」 [Graeber2011:121]。

負債が生じる状況では、支配-服従関係が完全に固定し成立しているわけではない。貸し手（債権者、金融機関、債権国や債権者）と借り手（債務者、債務国）の契約が成立するのは、両者が法的に対等で平等であることを前提にしている。親と幼子のあいだに法的な債権—債務の契約は成立しない。しかしながら、法的に対等な者同士が貸し借りの契約を結んだあとは、両者の平等性はそのまま維持されるだろうか？ モースの表現で言えば、借りている期間は、（経済的にも道徳的にも法的にも）「やられた」状態に身を置くことになるのである。グレーバーは、次のように述べている。「負債が未払いにとどまる期間は、階層性の論理が持続する」 [Graeber2011:121]。やられた状態は永遠ではない、完済すればもとの地位や身分を回復することができる！——このように信じてこそ、債務者や債務国は契約をするのだし、契約後は可能なかぎり返済し続けようとする。貸す側も返す側もそれが当然であるという理解を持ち、借金を踏み倒す行為や債務不履行は、社会秩序を脅かすきわめて不道徳で犯罪的な行為であるかのようにみなされる。これは、「借りたものは返さねばならない」という負債の道徳への束縛がきわめて強化された状況を示している。

21世紀現代の危機

地球的な規模で債権者を保護し債務者から取り立てる管理システムが強固に構築されればされるほど、グローバルな金融システムは不安定で制御不可能となり、しばしば深刻な危機に繰り返し陥るようになった。危機の度に金融機関が保護されるが、一般市民や債務国に対して「寛大」な減免措置や救済が適用されていない。「大きくてつぶせない」金融機関や大企業には公的資金を投入するが、高額な学生ローンを帳消しにすることは実現しなかった。「返済した人と返済していない人との不公平を助長する」という議論が強力だったためである。こうしたことは、「負債の道徳」が私たちの社会システムにおいていかに強烈に内面化され、規律として機能しているか、を示している [Graeber2011:387-389]。

3. 循環としての贈与

プラスの循環をつくりだす贈与（アンスパック）

負債論から『贈与論』を読む視座は、グレーバーが示しているように重要である。そして、

負債と並んで循環の観点から、現代において『贈与論』を再読するカギとなっている。Anspach[2002]は、現代の市場における「復讐の循環」に対抗するために、「贈与の循環」という観点から考察している。モースの贈与交換、とりわけ「その古巣、森や氏族の聖所やその他の所有者のもとに帰りたがる」ハウ(霊)を重視したことについて、循環の観点から読み解いている[Anspach2002]。アンスパックによれば、マオリの人びとは、「人から贈られるものの中に宿っている力」を信じることによって、贈与者と受贈者の二者関係に限定された相互的交換の枠組みを超えて多くの交換者が参加する、「全般的循環 *circulation générale*」を創造している。アンスパックが注視するのは、モースの『贈与論』では「贈与の流れ」が決定的な意味を持っている、という点である [Anspach2002]。

なぜすぐに返礼してはいけないのか——「生命を与える富」、あるいは「共通の富」

以下では、アンスパックの議論から離れ、モースの『贈与論』における「贈りもの」の性質について確認する。モースによれば、贈りものは「われわれが通常、支払い手段としているものとは異なる」。贈りものは、経済的価値のほかに呪術的な「護符」のような性質を持っている。護符は「財産を大いに増やすもの」であり、「富と食物をもたらすような富」[Mauss1925=2009:177]、つまり「生命を与えるもの (life-giving)」[Mauss1925=2009:121]である。加えて、贈りものは、物と人の循環の環のなかで、それが媒介する人間関係や社会集団の関係に影響を与える。そして、その影響力が贈りものの価値測定にも反映される (※ 贈与の流れから切り離され外れた富は、共通の富や生命を与える富ではなくなる)。すぐに返礼をしてはいけないという反対給付の原則が、物と人の循環を形成し、個人のあいだや社会のあいだにさまざまな関係を創造する。贈られ受け取りお返しする「財の循環」が続けられる期間は、「人間の循環」を活性化し、個人のあいだや社会のあいだの呪術的、宗教的、経済的、法的なさまざまな紐帯を増やしていく。「財物の循環は、男女や子供の循環、饗宴、儀礼、儀式、舞踏の循環、さらに冗談や侮辱の循環に続いて行われる」[Mauss1925=2009:114]。

そこには、富や価値についての功利主義経済的な見解や価値観が前面に出ることはなく、「祝祭」的な雰囲気彩られる。儉約や節約ではなく、相対的に巨額な奢侈を伴う譲渡や消費が、祭りのなかで実行される。交互に行われる舞踏、あらゆる種類の歌や道化、劇の上演、作られ用いられ装飾され磨かれ、集められ、愛情をこめて譲渡されるあらゆる種類の品物、喜んで受け取られ上機嫌で贈られるすべてのもの、食物、品物、奉仕などのすべてのものの移動が、個人のあいだと社会のあいだをつなぎ合わせている。